

言語の違い、認識のちがい



宮岡 伯人

大阪学院大学情報学部教授

1. 言語のはたらきと文化

人間の言語は、まず「文化」という仕組みのなかでとらえる必要があると、私は考えています。ではその文化とは何なのか、となると、じつに多種多様の定義がこれにはあるようですが、「環境」に適応していくストラテジー(戦略)としての側面を無視するわけにはいかないと思います。

今、危機言語と言語多様性の縮小を問題にしようとする場合、おそらく言語のもつはたらき(役割)をどうみるかということがたいせつなポイントになってくるはずです。ふつう言語といえば、コミュニケーション(伝達)の道具に決まっているのではないかと、とする言語の道具視がきわめて根強く存在しています。確かに、言語が空間も時間も越えてはたす伝達の重要性、社会生活を営むうえでの言語の不可欠さは、いうまでもありません。また、社会の変化に応じて効率的な伝達の保持あるいは増大をもたらすような変化が生じてくることも事実です。しかしそ

れでは、人間は単に伝達の道具として言語を生み出し、発達させてきたと考えていいのかどうか、これには疑問がないわけではありません。

人間の使ういわゆる道具(モノ)は、エスキモーがアザラシ漁に使った、巧みな仕掛けのある銚頭(回転銚)から、今日ではもはや一日も欠かせなくなったパソコンの類にいたるまで、文字通りしのごを削って進化していきます。人間をとりまく環境の厳しい要求(締め付け)に対し、当の集団に一定の行動様式にしたがって適応を図っていく(つまり生き延びていく)手段だからに違いありません。そのような道具、それをを用いて営まれる適応戦略という側面からみるならば、文化はおのずから環境適応という目的に強くしばられています。すなわち、直接的な意味で機能的にならざるを得ません。ということはつまり、余分な無駄は許されず、とり得る可能性の幅はかぎられてくる、ということを意味します。

それに対し、言語には、確かに伝達と

いうたいせつな目的がありながら、そのような道具(モノ)には、とうてい許されないような無駄、不規則、曖昧が少なくありません。谷崎潤一郎も、『文章読本』のなかで、非常に不合理なもの、不便なものだというようなことを述べています。言語が道具としてはそれほどスグレモノでないとするれば、それは(言語以外の)文化のような環境と向きあう適応戦略としての性格が弱いからではないでしょうか。環境適応とのかかわりでは、言語は間接的な意味でしか機能的にすぎません。つまり語彙(の一部)は別にすると、環境のしびりをうけることは少ない(自由度が高い)はずです。もし言語が道具をはじめとした(非言語的)文化と同じような直接機能性をもつものならば、その多様性ははるかにかぎられているはずです。おそらく言語は、環境適応の戦略としての文化とは本質的に違っていて、その道具性はむしろ副次的なはたらきではないかと考えざるを得ません。

さて、人間が今仮に効果的な道具と適切な行動様式によって環境に適応を図ろうとすれば、そもそも対峙する相手の環境が「カオス(混沌)」のままでは、手のだしようがないはず。「カオス」のままにしておくわけにはいかず、一定の「コスモス(秩序)」にかえる必要があるはず。つまりまず、環境あるいはその要素が、どのようなものなのかが「ワカッテ」、はじめて道具・行動様式が決まってくるはず。物事は、AをAでないものから「ワケル」ことによってはじめて、

「分け」つまり「訳」が「ワカル」道理だからです。「ワケル」と「ワカル」は、電話などを「カケル」と「カカル」と同じく、他動詞と自動詞が対になった(日本語文法でいう)「有対動詞」ですが、この分類と認識を対でとらえているのは、日本語の凄さのひとつといえるかもしれません。ちなみに今日、情報化社会に適応する最大の「道具」であるコンピュータは、Aか非Aかという、つまり1ビットから始まります。適応に必要な「情報とは」まさに「<区別>である」(渡辺茂、『認識と情報』、1968年)に違いありません。

人間が立ち向かわざるを得ない対象、すなわち環境をどのように分類・整理するか、つまりどのような「範疇」に分けるのかが環境認識の第一歩であり、そこから適切かつ有効な環境適応が始まります。「範疇」とその操作からなる言語と、一定の行動(行動様式)・態度・価値観との結びつき、そしてそれを集団として共有することではじめて、コミュニケーションが成立することになるはず。

2. 範疇化と範疇の操作

環境適応の前提である、この環境を「ワカル」こと、つまりは環境の「認識」に深くかかわっているのが、人間の言語です。ここにこそコミュニケーションに先立つ言語の第一義的なはたらきがあると考えられます。個々の集団は、自らをとりまく森羅万象をそっくりそのままではなく、選択的に自らの環境にとりこみつつ、独自の切り口つまり認識の方法にしたがっ

て細かく整理・分類しています。そしてその整理・分類に名づけが施され、記号として言語にとりいれられていきます。

『旧約聖書』の冒頭には、「光あれと宣のたまいければ光ありき」という句があります。これは、まさに言葉が直接環境を創世する、あるいは、(コミュニケーションとは違って)環境をじかに揺るがし得るといふ、言語のたいせつな直接的機能を表しています。とともに、『創世記』の1章3節から10節には、3日目前半までの創世の次第が語られています。その短い節のなかには、「分ける」、「分かち」、「名づける」という言葉が3回ずつでできます。「光をやみから分け、その光を昼と名づけ、やみのほうを夜と名付ける」という具合です。『創世記』の世界はまさに初源的な言語活動の世界であったわけで、まさにその意味でも、「初めに言葉(ロゴス)ありき」(『ヨハネ伝』第1章第1節)を理解することができます。

さて人間の言語には、少なくとも3つのレベルの範疇化が絡んでいるようです。すなわち 語彙的、2次的、文法的範疇化ですが、言語とはこれに基づく諸要素を一定の様式にしたがって、「カタチ」にしあげていく過程としてとらえられるのではないか、つまり言語による表現と思考とは、そのような範疇の操作いの謂ではないかと考えられます。まず範疇化から簡単にみていきましょう。

3. 語彙的分節

個々の集団が独自の切り口で森羅万象

を範疇化し、語彙的分類を施していくひとつの例として、私が、40年このかた勉強してきた南西アラスカのエスキモー語でみますと、1年はほぼ2分割されています。「キアック(夏)」と「ウクソック(冬)」という言葉があり、「キアック」の前に「ウプナフカック(春)」が、「ウクソック」の前に「ウクソアック(秋)」があることはありますが、「ウクソック」に接尾辞「アック」がついての(2次的な語形成による)秋であって、夏から冬への一瞬のような移行期でしかありません。エスキモーの世界は、春と秋は影がうすく、もう一方の、夏の前にある「ウプナフカック」も夏の「備えをする(もの)」という、夏に付属した一瞬の移行期を意味します。一方、エスキモーに隣接する同じような自然環境にある北東アジアのチュクチ語は、かなり違った季節分割をしています。呉人徳司氏によると、5つの季節があり、そのうちのもっとも長い冬は3分割され、合計7つの季節に範疇化されているそうです。エスキモー語との違いには、あきらかに環境条件だけではなく、エスキモーにはないトナカイ飼育という生業形態の違いが反映しています。

エスキモーといえば、よく「雪」を表す言葉のことが挙げられます。「カニック、アニユ、アプット、プカック、ベシュトック、アウベック」とあり、カニックは降っている雪、切片としての意味です。アニユは飲料水をつくるための雪、アプットは積もっている雪、プカックはきめ細かな雪、ベシュトックは吹雪、アウベ

ックはイグルーをつくるための切りだし
た雪です。これは、初めに「ユキ」があっ
て、それを細分化しているのではなく、
初めから別個に分かれています。つまり、
互いに音声の類似がないことからわかる
ように、(細雪、どか雪、粉雪といったよう
に、雪に形容をつけて2次的に細分化し
ているのでなく)それぞれまったく別物と
してとらえられた、最初からの類別化・
範疇化なのです。しかも、これはかぎら
れたエスキモーにとっての専門用語とい
ったものではありません。つまり、それ
らの個々の範疇は、(飲料水をとるもの、
イグルーをつくるものといった)生活上の
基本的な行動様式、それと結びついた道
具、技術などが切り離しがたく結びつい
た、エスキモーにとっては日常的な基礎
語彙だということを忘れてはなりません。

エスキモーのなかでも、ベーリング海
に浮かんだ小さな島セントローレンス島
の生活は、クジラ、アザラシ、セイウチ
の狩猟が生業の基盤であり、これとわか
わって、氷を指し示す単語(これも日常
語)が99語認められています(古くはも
っと多く知られていたかもしれないよう
ですが)。氷と雪の状態は、風と海流の演
じるドラマであって、おのずから伝統的
に天候に関する観察が非常に鋭くなって
います。氷を「コオリ」ひとつの語で表し
ては埒があきません。日本語では、
たとえば氷にかかった「雪庇^{せっぴ}」とい
った言葉は、冬山登山の人たちを除くと、
日常語として使うことはほとんどないで
しょうが、これをも含む99語はセントローレ

ンス島の人たちにとっては、2次的な特
別の用語ではなく、それをきちんと知識
としてもっておかないと生きていけない
基礎語彙なのです。

日々の生活のなかで、氷の生成や状態
について重要なのは、風向きを確認した
り気温や気圧を測定して得られる科学的
な認識ではありません。セントローレ
ンス島のエスキモーは、氷の区別とそれ
にまつわる伝統的な豊かな知識体系を保持
していますが、今日では、多くの人が最
新の科学的な知識をも身につけていて、
たとえば、海の氷と哺乳動物の回遊に対
する地球温暖化の影響を科学者以上に適
切に、しかも科学的用語で語ることで
きるようです。いわゆる欧米の科学・科
学者を超えた認識に達しており、伝統的
な氷の細分化に対する知識がこれに預か
っているのです。

語彙的な細分化の在り方には、当の集
団が環境世界のどの部分、どの特徴に強
い関心を向けていたのか、力点を置いて
いたのかが反映されています。そのため、
しばしば異文化をいわゆる参与観察とか
科学的な知識とか自文化の常識などで理
解しようとしてもなかなかとらえきれな
い側面が多くあり、それらから漏れてし
まうような重要なポイントを捕捉する手
掛かりに、言語の語彙的(そして次の2次
的範疇化)がなり得ます。

4. 2次的範疇化

2次的範疇化について、わかりやすい
のは名詞のジェンダー(文法性)、クラス